

「地域で頑張る企業・NPO」を“つたえ”“つなげる”
学生レポーター 取材まとめ



取材日時：平成 25 年 10 月 18 日（金）

取材先：河田フェザー株式会社（明和町）

レポーター名：張山、丹羽、山根

“羽毛を次の世代へ” 河田フェザー(株)の取り組み

毎日使うものは、できるだけ清潔で安心して使えるものを選びたいというのは、消費者は誰しも思うことであろう。尚且つ、それが社会や環境に役立つものであればなお望ましいことであろう。

三重県多気郡明和町に本社機能を持つ河田フェザー株式会社は羽毛の精製加工や、羽毛を使った寝具の生産などを行う会社だ。明和町で採取される“超軟水”や世界水準の技術を用いて徹底的に汚れや埃を落とし、赤ちゃんにも安全な製品を生み出している。

羽毛の需要が世界的に高まっていくのに対し、羽毛の供給量は徐々に減ってきている。羽毛は元々食用のアヒルやガチョウの副産物であるが、近年、低コスト化に対応するために飼育日数が短くなってきており、このことが、2つの問題を引き起こした。まず1つ目は、水鳥の脂が少なくなってしまったために味が落ち、水鳥の肉の消費量が減ってしまったことである。2つ目は、1羽あたりの羽毛の量、及び羽毛の質の低下である。これらの2つの問題が羽毛の供給量の低下を招いており、羽毛業界に打撃を与えている。

こうした状況の中で、「次の世代にも羽毛製品を使って欲しい」という思いから河田フェザーが始めたのが、羽毛のリサイクル事業である。河田フェザー代表取締役社長の河田敏勝さんによれば、羽毛は元々リサイクル可能な循環資源で、100年使用することも可能であるという。しかし、日本ではそうした認識はあまり浸透していないのが現状である。さらに驚くべきことには、羽毛をリサイクルせず捨てているのは日本人だけであるという。

そこで、河田フェザーは、リサイクル事業を始めるにあたって、関連会社のエコランド有限会社で、スポーツアパレルメーカーである株式会社ゴールドウインと提携し、全国各地で不要になったダウンジャケットを回収し、羽毛製品に再利用する「GREENDOWN RECYCLE PROJECT」や、地域の障がい者支援施設「ありんこ」と協働で羽毛を回収、リサイクルする「UMOU プロジェクト」を行っている。

中でも「UMOU プロジェクト」は、「あなた もっと 応援 あなたに」というモットーを掲げており、「地域に暮らすあなたの優しさが地域の力になる。それがあなたの価値と

なる。」という想いのもと、地域の繋がりを非常に大切にしており、一つひとつのやさしさの想いを大切に活動を行っている。具体的には、明和町内の小学校区の家庭を中心に、使っていない羽毛布団の寄付を呼びかけ、それをエコランドが買い取り、その一部は赤い羽根共同募金として町の小中学校の福祉事業にあてられている。また、羽毛布団の回収・選別・解体といった業務はありんこへ委託し、地域の障がい者の就労機会を増やす取り組みにもなっている。回収された羽毛は、河田フェザーで新品よりも厳しい基準で洗浄されるので、安心して使うことができる。

「羽毛はリサイクルできる、ということをもっと多くの方に知ってもらいたい」と話すエコランドの取締役社長黒田健さん。次の世代にも良い羽毛を使ってもらいたいとの思いで活動を続けている。

タンスや押し入れに眠る羽毛が、リサイクルで地域にやさしさの風をもたらし、次の世代へと“あたたかさ”を繋いでゆく。

< 編集後記 >

何よりもまず、羽毛がリサイクル可能なものであるということや、羽毛を捨てているのが日本人だけという事実には驚かされました。また、食用の水鳥の副産物であるという認識も薄かったため、今回の取材はとても新鮮なものになりました。

リサイクル事業などを通して、地域貢献活動を行っていることは非常に素晴らしいと感じました。また、製品の安全性を追求した姿勢や、従業員を大切にしようとする取り組みにも強く共感し、まさに、「三方良し」を目指している企業であると感じました。地域と連携してより良いものを生み出すことができるのは、中小企業ならではの強みであると思います。こういったところを知ることができたのも、大学で経営学を専攻している我々にとっては、たいへん有益なものとなりました。

記事に書ききれないほど、他にも貴重な話を聞かせていただくことができ、とても面白かったです。河田フェザーさんには、これからも素晴らしい活動を続けてほしいと思います。